

「三光丸」引札の物語

——薬と刷り物(二)

石塚純一

はじめに

戦前のある時期、講談社が「どりこの」という薬を発売し、平凡社も「フカツ（賦活）」という強壯剤を売っていた。本屋がどうして薬を売なのか、薬屋と本屋の関係について考えている。今回は、奈良県吉野郡の一薬局に残された昭和初期の薬の宣伝印刷物を入力したことをきっかけに、実際に大和上市^{かみいち}を訪れてこの薬局を確認し、昭和初期に製薬会社各社から薬のチラシやパンフレット、定期刊行物（PR誌）その他景品類といった文字とイメージが刷り物となって大量に発せられたことをみた。薬局はそれらを使って地域の保健教育に一役買い、ニュース等を発信する一拠点となっていた。^{*1}

明治に起こった近代の製薬と薬局の制度は現在のドラッグストアや調剤薬局につながる商法だが、薬にはもう一つの売り方があった。「売薬」と呼ばれた行商による販売法である。町の薬局が地域に根差して薬と諸情報を届ける場だったとすれば、「売薬」は

*1 拙稿「どりこの」の謎——
薬屋と印刷物」『比較文化論叢』22
号、札幌大学文化学部紀要、二〇〇
八年

行商人が薬とともにさまざまな情報を山間僻地まで運んでいく商売の方法である。この業態の異なるもう一つの薬屋を探るべく大和地方をさらに旅することにした。

奈良県は売薬の先進地域の一つである。近鉄吉野線の壺坂山駅つぼさかやまを中心とする高取町は薬の町として知られ、いまでも数多くの製薬会社が存在する。土佐街道の古い町並みの一角には夢創館という小さくすり資料館があり、古い製薬の道具などとともに、現在高取町で配置薬として製造販売されている薬が陳列されていた。高取町と隣り合いやはり製薬を地場産業とするのが御所市ごせである。御所市今住には三光丸といういままも続く配置薬会社がある。

大和売薬に関する資料を集めているという三光丸本店を訪ねて御所市へ出かけた。近鉄吉野線で橿原神宮前駅から四つ目の市尾駅で下車、駅前に行くつもある古墳を見ながら畑道を行くと、JR和歌山線の線路に出る。ガードをくぐり小高い山の端に沿って右手に進むと大きな民家が並ぶ。米田こめだという表札が多いことに気付く。細い道をさらに進むと左手の山あいには和風建築を装った三光丸の本店と庭園、クスリ資料館がある。クスリ資料館には数多くの引札や版木類が残されていて、明治期の引札を見ていくうちにその画題に目を惹かれていった。今回はこの三光丸という一つの薬を通してその売り方、薬にまつわる情報群について考えてみたい。ちなみに三光丸は配置薬であるために一般に知られていないが、大相撲の取り組みの懸賞旗（黄色地に商標を表す）によくその名をみかける。この三光丸は多くの伝承や物語に包まれている。全国に配置販売網をもつ三光丸は胃腸薬を届けると同時に何を運んで来たのか。

売薬の盛んな地域

「売薬」は今では配置家庭薬と呼ばれている。大都市では近年見かけることが少なくなりましたが、今でも全国的に行われている。行商によって置き薬を商うもので、「先用後利」をスローガンに業者は家庭を訪問し、薬箱を置いて行く。利用者は必要な時に薬を使い、半年ないし一年後に回ってきた行商者（売薬さん）に使った分だけ支払い、新たに翌年分の薬を差し替えてもらう販売システムである。有名な「富山の薬売り」をはじめめとして、奈良県の大和売薬、滋賀県の近江売薬、佐賀県の田代売薬などが古くから広域商圏をもって活動を展開してきた。それぞれが売薬業を育てた地域的な特徴を備えている。

生薬とは、自然界に存在する物質で動物にとって有用な素材から精製する薬をいう。生薬の内、東洋医学の漢方医が用いたものを漢方薬といい、日本特有の医術が用いた薬を和方薬という。伝統的な売薬には和漢薬が多い。反魂丹、熊膽丹、六神丸などを配置家庭薬として今も売っている富山売薬は、一八世紀半ばに富山藩主前田正甫が、反魂丹役所を設け売薬を保護育成、統制したことによって全国的な売薬網が成立した。その背景には立山信仰に基づく修験者の幅広い配札活動があったといわれる。

一方、大和売薬が産薬として確立するのは明治時代とされるが、大和は古代の「薬狛」（『日本書紀』）の地であり、江戸時代には薬種になる植物を薬種商が集中する大阪道修町へ供給してきた。売薬が始まったのは江戸の中期といわれる。また大和には葛城山、大峰という修験の聖地があり、役行者伝説に基づく陀羅尼助（大峰洞川・吉野・当麻寺中之坊にそれぞれ由緒書きが残る）という薬があり、また西大寺には鎌倉時代の僧叡尊

*2 『奈良県薬業史 通史編』奈良県薬業史編さん審議会編、一九九一年、奈良県薬業連合会、四六ページ

が創始したと伝える豊心丹があった。

近江売薬として知られる滋賀県の甲賀や日野は東海道の要地として交通が開け、商業が盛んな土地だった。売薬の種類も多く、中でも草津の是齋和中散が名高く、『近江輿地志略』や『東海道名所図会』には立派なその店構えが載るがその由来には諸説ある。近江売薬も多賀社や伊勢の朝熊山の信仰と結びつけられているが、中世に栄えた甲賀地方の飯道山修験を支えた在地の山伏たちによる畿内の主要な神社の配札活動と売薬との関係が興味深い。

九州の田代売薬は対馬藩の飛び地領だった田代（現佐賀県）で始まった売薬業で、朝鮮貿易の主な輸入品だった人参などの薬種と渡来の製薬技術を用いて一八世紀に九州・中国地方を商圏として売薬業を成立させた。

こうした売薬業地以外にも伊勢（万金丹）や江戸（錦袋円）、小田原（外郎）など各地に有名な薬はある。全国津々浦々を訪ねれば薬のすそ野は広い。三光丸もその一つである。

一、大和の売薬と三光丸伝承

三光丸はセンブリ、ケイヒ、オウバク、カンゾウ、薬用炭を配合した健胃和漢薬である。三光丸本店は米田徳七郎氏を社長とする米田家が代々オーナーを務める会社であり、全国に営業拠点を持ち先用後利の配置販売をおこなっている。三光丸の商標は二つの円と三日月からなる特徴的なロゴマークである（図1）。これは江戸時代末にすでに用い

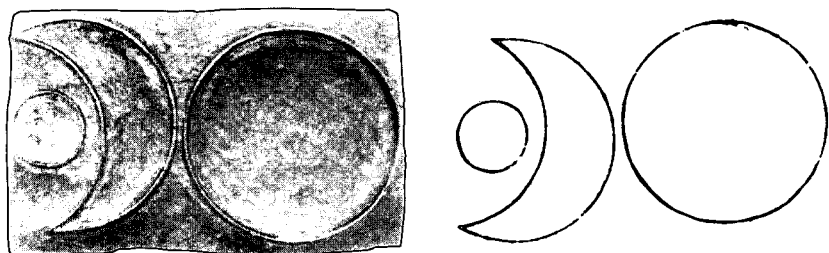


図1 三光丸の商標マーク。星・月・太陽をデザイン、左はクスリ資料館所蔵の版木

られていた。

「由来」をめぐる

この度は三光丸クスリ資料館の館長浅見潤氏のご厚意で特別に資料を閲覧・複写させていただき教示いただいた。三光丸の由来については館が発行する「クスリ資料館だより」でわかりやすく解説しているのでそれらを参考にすると、三光丸はもともと中世大和の武士団として勢力をもった越智氏の秘伝薬として元応年間（一三一九～二一）に作られた「紫微垣丸」という薬だった。南北朝時代、越智邦澄は南朝方として高取城を中心に結束し、吉野に下った後醍醐天皇にこの「紫微垣丸」を献上したところ、「日の神、月の神、星の神の授け給ふ薬」として「三光丸」の勅号を与えられた。三つの光とは太陽・月・星で、越智邦澄の孫の一人、米田俊武がこれを米田家の家伝薬として伝えたと。これが三光丸の由緒の大概である。

中世南大和の有力武士だった越智氏は越智党ともいわれたように多数の分族をもち、米田家もその一族であった。越智党は長くつづいた戦乱の果て、一六世紀半ばに筒井氏との戦いに破れて消え去ったために、近世における米田氏の歴史はたどれないと資料館の浅見氏は説明してくれた。江戸時代後期に米田家が在地の豪農としてあったことはたしかだが、近世の大和の売薬関連史料はあまりに少なく、中世の伝承と近代の三光丸とを結ぶ糸は途切れている。

したがって、『奈良県売薬史』は大和売薬業の一般的な成立時期を江戸中期とし、その時期に三光丸など葛城郡今住の薬業も成立したとみている。史料として米田徳七郎丈

* 3 『滋賀の薬業史』（滋賀県薬業協会、一九七五年）、『歴史地名大系 滋賀県の地名』『飯道山』の項（平凡社 一九九一年）

* 4 小林登「田代売薬（対馬田代領）の史的研究」『史叢』15号、日本大学史学会、一九七二年

* 5 中国古代の天文学に表れる北極星の周囲に位置する星座を紫微といた。紫微は天を表す。

* 6 「クスリ資料館だより」三光丸クスリ資料館発行、『三光丸同盟会創立百周年記念誌 同盟人百年の軌跡』一九九九年、三光丸同盟会

助が文政年間（二八一八～三〇）に播磨から尾張まで行商を行った記録（『南葛城郡誌』）、さらに三光丸の米田家が属する薬種屋株仲間が天明三年（一七八三）に結成されたこと、安政七年の仲間規約の年行司を三光丸の「米田丈助」が勤めた文書などを挙げ、「国中組合取極連印帳」に「今住組（葛上郡・高市郡）の場合、薬種屋九人、和薬種屋一三人、合薬屋五人」が名を連ねていたとし、幕末にはこの地域の売薬業が盛んであり、その中心に米田家があったことを明らかにしている^{*}。

以上のように、店の伝承では三光丸の創成を南北朝期にさかのぼるとしているが、大和薬業史の研究では江戸中期だろうとする。個々の売薬の「伝承」など取るに足りないかと否定するのは簡単だ。また伝承部分を取り除いて歴史の真実に迫ろうとする方法もあるだろう。しかし、ここでは伝承と史料を並置した上で、このような伝承（物語）が生まれてきた背景についてもう少し見ておきたい。

たしかに紫微垣丸の創薬と後醍醐天皇による改名、その薬と現在の三光丸との関係や米田氏に伝わった経緯などを実証的に確かめることは困難である。現存する史料だけから判断すれば、米田家が江戸時代後期に農業の副業として薬の製造販売を始め、その過程で大和の歴史や『太平記』にまつわる話などを参考に三光丸の由来を作り出したのかもしれない。しかし、三光という日・月・星を表す言葉とイメーজ（マーク）はさまざまに想像をかきたてずにおかない。売薬と印刷物というテーマとは少しズレるかもしれないが、薬という商品を持つ物語性を考えるよすがに、中世における「三光思想」についての研究を参照することをお許し願いたい。

* 7 「奈良県薬業史 通史編」木村博一執筆、奈良県薬業史編さん審議会、一九九一年、五一ページ、および「同 資料編」同編さん審議会編

『言継卿記』に載る薬名

その前に一つ確認しておきたいのは、「三光丸」という薬名が一六世紀の公家の日記の中に載ることである。戦国期（一五〇一―一六世紀）に著された公家や寺院の日記、たとえば『御湯殿上日記』、『実隆公記』、『多聞院日記』、『言継卿記』には薬の名（麝香丸、牛黄丸、蘇合丸、人參香丁酸、愛州薬、調中散など多数）が頻出する。中でも貧乏だった公家の山科言継の日記『言継卿記』は、宮中勤めの傍ら医学を学んだ人物の日記だけあって医療や薬に関する記述が多い。同記の天文一九年（一五五〇）四月一五日程に、『西専庵取次三光丸百粒、所望之間遣之、代十至』とあり三光丸の名が見える。服部敏良は『言継卿記』に表れる医療の記事を調べ、言継が公家から庶民にいたるまで幅広く診療にあたったことを明らかにし、臨床上使用した薬方を一四〇種として表に示している。ここで三光丸は虫気症状の薬として挙げられている。^{*8}

このように「三光丸」は、多くの薬名に混じって登場するが、これが現在の三光丸に直接つながるかというところも定かではない。一六世紀の日記に登場する三光丸が果たして一四世紀にもあったのかという点も明らかではない。この点他の大和の薬はどうだろうか。

宗田一は、大和西大寺の豊心丹などの薬の起源は南北朝期（一四世紀）までさかのぼれるという。西大寺中興の祖叡尊の創始と伝える豊心丹の由来には、三光丸の由緒と似通った部分がある。叡尊が仁治年間（一二四〇―四三）に除疫のために伊勢神宮に参籠祈願した結果、神薬の法を授かり、これを四条天皇に報告すると「叡喜斜めならず」これに豊心丹の勅命を賜ったというのである。天皇から薬の名前を授かったところか

*8 『言継卿記』卷三（国書刊行会本）。今谷明「言継卿記」公家社会と町衆文化の接点」（そして、一九八〇年）

*9 服部敏良「室町安土桃山時代医学史の研究」吉川弘文館、一九七一年、一〇七ページ

三光丸の伝承と一致する。しかし叡尊の自伝『感身学正記』は自身が伊勢神宮に参籠し真言修法を行ったことは記すが、時期も目的（文永・弘安の蒙古襲来と調伏に関わる目的）も違うとして、宗田はこの由来を退け、公家の日記等史料に多く出る菓名の検討から他の寺院施薬・売薬製剤と同様に、豊心丹のはじまりを南北朝期と考えているわけだ。^{*10}

三光思想と日月星のイメージ

このように見てくると先の三光丸本店が伝える後醍醐天皇と三光丸の関わりの伝説にもう一度光を当ててみてみる。伝承が生まれる背景を探っていくうちに、黒田智の『中世肖像の文化史』と出会った。黒田は中世の大和をはじめ畿内各地に「三光思想」と呼ぶべき観念やイメージが広がっていたことを指摘する。三つの円光、すなわち太陽と月と星をシンボルとした信仰・思想はさまざま言説を生んだ。^{*11}

奈良時代から三光の出現は稀有な吉祥とされた。黒田によれば、三光顕現の初見は『三代実録』貞観十七年（八七五）六月。下って『看聞日記』永享五年（一四三三）十月二七日条に「邂逅のことなり」とあり、『蔭涼軒日録』も「稀有の事、嘉瑞の吉兆」とし、日蓮は三光天子の信奉者であったという。また『太平記』巻八は、三光出現の奇瑞を次のように伝える。

船上の皇居に壇を立てられて、天子自ら金輪の法を行せ給ふ、その一七日に当りける夜、三光天子光を双て、壇上に現じ給ければ、御願成就しぬと、憑しくそ思召しける。

* 10 宗田一『日本の名薬』八坂書房、一九八一年、二四ページ

* 11 黒田智『中世肖像の文化史』ベリカン社、二〇〇七年、第X章「勝軍地蔵と日輪御影」

後醍醐天皇の倒幕の御願成就は、太陽・月・金星が並び現じる奇瑞によって兆したことがわかる。

さらに三光を日本・インド・中国の三国になぞらえたり、三種神器にたとえたり、密教的な解釈もおこなわれ、伊勢神道でも内宮外宮の見立てに用いられた。全国各地に三光の民話や地名があることなど黒田の説は豊富な事例を挙げてたいへん興味深い。南朝にあった後醍醐に「紫微垣丸」を献上し、その効験から三光丸の名を与えられたとする伝承にはこのような中世の信仰やイメージや物語が反響していることは間違いなからう。

さらにまた黒田は、中世に数多く残された日月星の三光（円相）を描く神仏習合の画像に注目、「聖徳太子・文殊菩薩相見図」（図2）「多武峯曼荼羅」（善峰寺参詣曼荼羅）（図3）など八点の絵画を読み解きつつ、これらの図像が天台文化、山王信仰を背景に



図2 「聖徳太子・文殊菩薩相見図」上部の山の上に三つの円相。大阪・四天王寺蔵

成立したことを明らかにする。中世の大和は興福寺の圧倒的な勢力下にあった。その中で多武峯は唯一天台文化を標榜し、興福寺と敵対し、戦闘が繰り返された。その多武峯に隠棲した元天台座主良助法親王（一二六八―一三三八）が書き残した『与願金剛地藏菩薩秘記』は、軍神的性格を持つ勝軍地藏の信仰を宣揚し、さらに日・月・星の三光出現にもふれている。良助法親王が勝軍地藏とともに論じる三光地藏は、三光に関するさまざまな言説の中にあって「三國觀念の問題」と密接に関係をもつと黒田智は述べる。つまりインド・中国の地藏信仰と比較して日本を日光地藏の本国とし、三國のうちの太陽になぞらえる。それは「仏教東漸に基づく日本」「辺土」「小国」意識の克服という中世仏教共通の課題と表裏をなして、日本の神仏の優位性を主張するものだというのだ。

このように「三光」は中世的なアナロジカルな解釈、比喩的なイメージに満ちた現象であり思想でもあった。さらに近世から近代まで三光と日輪のイメージはさまざまな形で現れた。豊臣秀吉の「日輪の子」や神国日本意識、「東照宮縁起」、日中戦争時代の「三光作戦」にまで連なると黒田は指摘する。三光は戦う神仏のイデオロギーを担ったものでもあったわけである。

だいぶ迂遠な道をたどったが、三光丸のマークには、三つの円相画像や『太平記』の後醍醐天皇の奇瑞や勝軍地藏信仰などさまざまなイメージを含む、三光思想がこだましていることは間違いないといえるだろう。しかしながら史料的には、一六世紀半ばに「三光丸」の名の薬が公家の日記に表れるだけで、江戸時代後期までその行方は不明なのである。



図3 「善峰寺参詣曼荼羅」上部左右に日月を配し、その中間に雲に乗る小さな星（明星）を描く。
京都・善峰寺蔵

二、近代における三光丸の自己アピール

さて三光丸が売薬として畿内を中心に製造販売されるようになった時代に移る。先に見たように一九世紀の初期である。慶応二年の「仲間取締議定書連印帳」は、米田丈助以下七一人の大和の業者と越中富山惣代三人、加賀領惣代二人との間に取引交わされた販売協定書であった。三光丸の米田家が行事となって、薬価の一斉値上、行商者同士の値引き合戦や虚言悪口を慎むこと、他人の薬をけなさないこと、奉公人の給金について、旅先での行動倫理についてなど一四カ条を定めている。売薬業の先進地域だった富山の業者を含めて、商売上の取り決めに仕切る大事な場面で三光丸の米田丈助がこれを担ったことは、三光丸が売薬業者として一定の力を保持していたことを表すものだ。

この文書から当時大和地方に七二人の売薬業者がいたこともわかる。その中心的な地域は高取、葛地区であった。『奈良県薬業史 通史編』の付図(図4)をみると、慶応二年の配置薬業者は今住、市尾近辺に特に集中する様子がわかる。また別の論文では、昭和二十六年の薬業統計から高取町と御所町に売薬業が集中していたことを示し、薬業の開始時期は南葛城郡葛村大字今住が古く、高取町で始まったのは明治初期以降と指摘する。さらに植村藩二万五千石の城下町だった高取町の場合、廃藩置県で士族の職がなく^{*13}なり、士族出身者が売薬業を始めたという。

明治時代に入り売薬は西洋医学の導入を推進する新政府によってさまざまな規制を受けた。日本の薬業が制度的に一変したといっても過言ではない。売薬の検査と免許制、

*12 前掲注7「奈良県薬業史 通史編」六三ページに掲載された図

*13 古川潜「大和高取町の売薬」『人文地理』一九五三年五号、人文地理学会

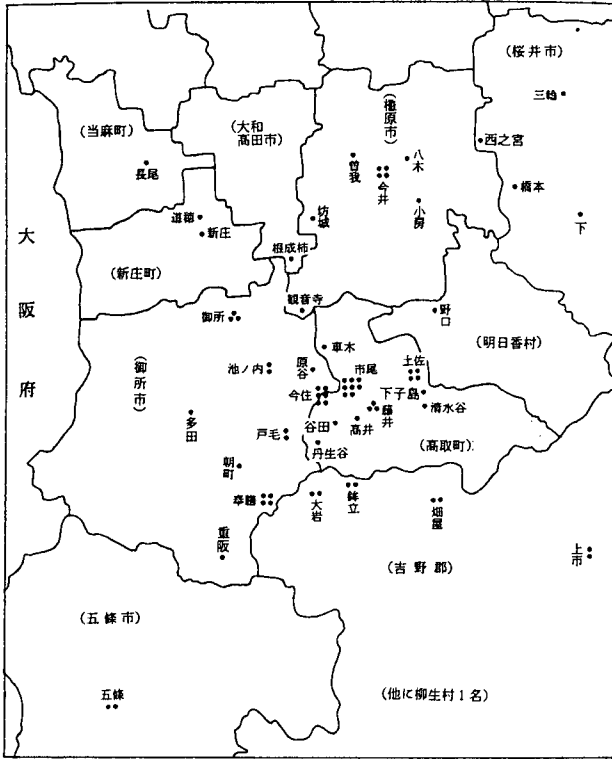


図4 慶応二年（一八六六）配置売薬業者の分布。『奈良県薬業史 通史編』より

新鑑札制、薬舗開業試験の実施、営業税と鑑札料の規則、売薬印紙税というように明治三年から一五年にかけて売薬免許が厳しく規制されたのは、当時の政府が売薬に対して不信任を抱き、有害無効とはいわずとも「無害無効」との考えが根強くあったからで、漢方医が日本の近代医療制度から排除された経緯と軌を一にしている。洋薬の移入によって薬種問屋や薬種業者は転換を迫られ、洋薬の輸入販売から洋薬製造へと模索する業者

も多くいた（これらが近代製薬業として発達）。

しかし、過大な課税の中で廃業に追い込まれた売薬業者が多かったにもかかわらず、生薬中心の配置売薬への需要は衰えることがなかった。売薬印紙税の年間徴収額は、薬の製造販売の推移を表すが、それをみると明治一六年（一八八三）に最初に印紙課税されていったんは縮小がみられたが、明治二二年には印紙税実施時の水準に達し、明治二九年にはその二・八倍に増加したことがわかる。これは全国平均の増加率一・八倍を大きく上回るもので、大和売薬が明治中期以降隆盛に向かったことを表している^{*14}。三光丸もじつはこの波に乗って業務を拡張していった。

配置薬は明治期に拡大発展したのだ。薬に対する潜在的な需要は依然として大きく、売薬への信頼も保たれていたからである。また宣伝の効果もあった。三光丸クスリ資料館に残された配置売薬業の仕組みを語る文書、引札、看板、ビラ、土産物、薬袋や効能書きの印刷に用いた版木を見ていこう。主に明治期以降のものだが、中には幕末の薬方に関する文書や古い版木が混じる。そこから三光丸が自らをどのようにアピールしようとしていたのかが見てとれる。

引札の力

引札^{ひきだて}は広告チラシのことで江戸時代から明治期にかけてこう呼ばれ、店の案内や商品名が印刷されて広く配られた。増田太次郎によれば化政期に大いにはやった。ビラは「貼り札」「絵びら」とも呼ばれ、引札が配るものとすれば、ビラは貼る広告で江戸期には手描きされることが多く、明治期のものは印刷されたという。また引札類には「名入

*14 武知京三『近代日本と大和売薬』税務経理協会、一九九五年、三二ページ

れもの」と称されるものがあり、「どこにでも通用できるような絵や文があって、それに店名の文字を刷り込んだもの」で、これが引札の全国的な普及に力あった。明治期にはこれを「お所版」と呼び、印刷術が木版から石版刷りに変化し大量印刷されるようになると、正月用引札などのお所版が盛んに作られた。¹⁵三光丸の引札にもこれが見られる。クスリ資料館に残された三十数点の引札・ピラ類の大半は年代を明らかにしないが、中に明治一四年印刷のものがありこれがおそらく最も古く、昭和戦後のものまである。顧客への土産品だった大阪名所の錦絵や、「火の用心」の貼り札と、「食べ合わせ表」なども含まれている。絵柄もさまざまで第一次大戦時の時局を表すものや「日満支の新東亜建設」にかけたものもあるが、日本の歴史や神話に題材をとった絵が多い。

宣伝材にはどのようなものを選ばれ、どのように使われたのか。配置葉の三光丸は薬局に商品を卸してはいないので、前回に述べたような薬店の販売促進のためのポスターではない。大きさは約三五センチ×二五センチのものが多く、貼り札は約一二センチ×二四センチと小型である。売葉さんが各地の顧客に配って喜ばれるものだったのだろう。土産物といえば富山売葉では九谷焼などもあったというが、家庭向きの「紙風船」が一般的で、三光丸でも風船や三角帽子を作っていた。これらは軽くて持ち運びが楽な宣伝用の拡材だった。

また富山では「売葉版画」とよばれた錦絵も土産物として配られた。古いものの中には歌川広重の「東海道五十三次」の後刷りや大小曆、熨斗絵などがあった。最近、富山県の旧家で歌川国芳、広重らの大量の版木が見つかったとの新聞記事があった。まだ実物を確認していないが、富山県で浮世絵の版木と聞けば直観的に売葉関連のものではな

*15 増田太次郎『引札絵ピラ風俗史』青蛙房、一九八一年、一五ページ

いかと思う。^{*16} 明治中期から大正期の富山の売葉版画は芝居絵が圧倒的に多かった。これらは富山に移り住んで制作した専門の絵師尾竹国一ら（尾竹国一、竹坡、国観三兄弟のほか東京の絵師もいた）が手掛けたものであることがわかっている（図5）。^{*17} 富山の売葉版画が役者大首絵風の芝居絵に特徴があるとすると、三光丸の引札には歴史物語画が目立つ。

増田太次郎は引札の絵柄について、明治期の農村では都会のはなやかで楽しい絵ピラを家の障子などに貼っていたと述べ、「娯楽や読物に乏しい農村では、画題となった歴史上の人物や動植物について両親が子供たちに語って聞かせる教材になった」という（同前）。引札が家々でどのように用いられたのか興味あるところだが、現代のチラシとは異なりむげに捨てられたわけではなかったろう。

神話や歴史の画題

明治期に入って歴史画が盛んに作られたことはもっと考えられてよいテーマである。幕末の浮世絵に武者絵が描かれたとしても、神話や歴史を画題とする絵画は江戸期に比べて格段に増えていく。国学の流行や明治前期の国粹主義的風潮のなせるわざと言ってしまうとそれまでだが、どのような歴史物語のシーンが選ばれているか、本画なのか挿絵が多かったのか、主な描き手は誰だったのかなど興味深い問題が横たわっている。菱田春草の「王昭君」、小堀鞞音「薩摩守平忠度桜下詠歌之図」、安田鞞彦「吉野訣別」（図6）、前田青邨「洞窟の頼朝」など日本美術院の画家たちのみならず、曾山幸彦「武者試鵠図」、青木繁「黄泉比良坂」などの洋画家たちも手掛けている。近代を代表する

*16 「朝日新聞」二〇〇九年四月八日の記事。富山県の旧家で数年前に見つかった国芳、歌川広重らの版木三六八枚を国立歴史民俗博物館が購入、「錦絵はいかにつくられたか」展を開催した。

*17 『明治の売葉版画』富山市教育委員会、一九九七年



図5 尾竹国一「忠臣蔵 七段目」
富山売葉版画の代表的な作品 富山
県立図書館

画家たちの仕事にも表れ、一方で大衆的な引札にも盛んに描かれた。

ただ、葉の引札に神話歴史画が多く用いられるかといえばそうとも言えない。内藤記念くすり博物館（岐阜県羽島郡）が全国から集めた葉広告をみる限り、その画題は名所絵や当代風俗画が多く、神話歴史画が特に目立つとはいえない^{*18}。したがって三光丸あるいは大和地方の葉が、自らのアイデンティティと葉の信頼度を高めるために古代・中世にルーツを求めようとしてこうした画題を選んだのかもしれない。

三光丸の引札から古代の神話や歴史を描いたものを選び出すと、「神功皇后と武内宿禰」(図7a・図7b・図8)「スサノオのオロチ退治」(図9)「蘇我入鹿の殺害」(図

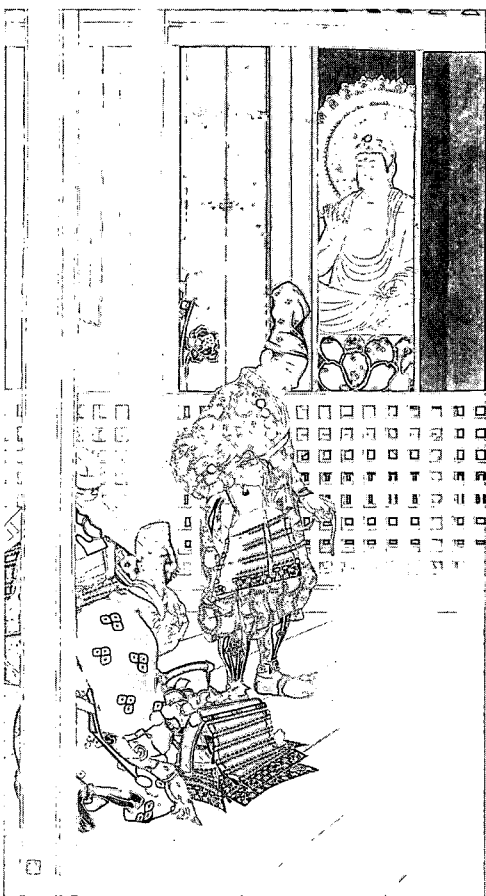


図6 安田毅彦「吉野訣別」 明治32(1899)年 修善寺町蔵

*18 『くすり広告』一九九五年、『はやり病の錦絵』二〇〇一年、『くすりの広告文化』二〇〇三年、すべて内藤記念くすり博物館発行図録



図7a 「神功皇后と武内宿禰」大和売薬済民社の引札。複数の葉を宣伝する。



図7b 「神功皇后と武内宿禰」三光丸の引札。7aと同じ絵柄だがよく見ると神功皇后の後ろの旗のマークが異なる。これは日・月・星の三光を描くが、図7aは日・月だけだ。



図9 「スサノオのオロチ退治」

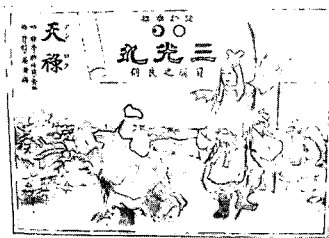


図8 「神功皇后と武内宿禰」後ろの従者が持つ旗には三光丸の商標に近い月と日が描かれる。



図12 「渡辺綱と羅生門の鬼」

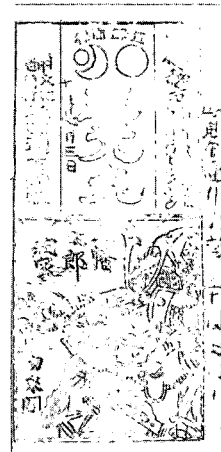


図13 「八幡太郎義家」

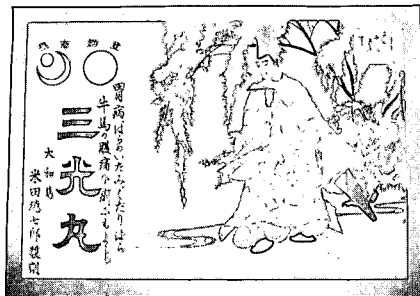


図11 「小野道風と柳に蛙」

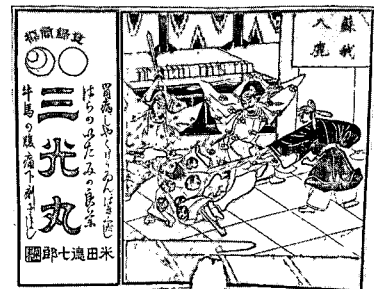


図10 「蘇我入鹿の殺害」

10)「小野道風と柳に蛙」(図11)「渡辺綱と羅生門の鬼」(図12)「八幡太郎義家」(図13)がある。この内、図10・13以外はすべて先述の「お所版」で、図9と図12を見ると絵の中にホワイトスペースがありここに「三光丸」の名前が後から刷られるわけである。何の説明もなく絵柄を見ただけで「渡辺綱と鬼」の話だと誰もが了解できるイメージ喚起力がこれらの絵にはある。図8・図7a・7bと図14は、神功皇后伝説を描いた図像で、武内宿禰が幼い応神天皇を抱き九州に帰還した皇后に仕える様を描く。『古事記』に見える神話で明治時代に多く絵に描かれ広く知られた神話である。同様の絵柄だが三光丸用のものは一部を都合よく描き替えられている。図版を比較してよく見てほしい。同じモチーフをもつ絵が富山売葉の葉袋にも用いられているが(図14)、こちらは婦人葉「婦人の望」である^{*19}。

三光丸を選んだ中世の伝承や歴史画像も多彩である。「那須与一の扇射ち」(図15)「源義平と平重盛の一戦」(図16)「曾我兄弟の仇討」(図17)「楠正成、正行桜井の別れ」(図18)「少年虎之助(加藤清正)と木下藤吉郎」(図19)「貼り札「浦島太郎」と「真田幸村」(図20)「源義経八艘飛」などで、『平家物語』『太平記』『曾我物語』や戦国時代の逸話などから場面が選ばれたわけだが、合戦の場面や一騎打ちなどで活躍する強い武将が登場するのは、葉が病や細菌といった敵を撃退させる見立てになっているからである。

近世に題材をとったものは少ない。「忠臣蔵 出世酒屋の由来」(図21)「正月風俗図」(宮川長春の絵を用いた図柄、明治四一年印刷)(図22)、「宝船」、また「画題不詳の侍の図」(図23)がある。「宝船」や図22は正月を寿ぐ引札で、葉に限らずどんな商品にも



図14 「神功皇后と武内宿禰」久郷魁進堂(富山)の葉「婦人の望」上袋。図7と図8とモチーフは同じだが絵柄は異なる。

*19 「売葉の印刷文化」富山市民俗民芸村特別展図録、富山市売葉資料館編、二〇〇〇年

*20 宮川長春(一六八二—一七五二)江戸中期の浮世絵師で肉筆美人画をよくした。



図15 「那須与一の扇射ち」三光丸の来歴宣伝文に源平合戦の有名な場面が付く。欄外に「明治十四年印刷物」との書き込みがある。

図16 「源義平と平重盛の一戦」。「明治五年 著作印刷 大阪市東区住吉町 三木直吉」と発行者が記される。大阪の印刷業者に発注したのだろう。おそらく他の石版刷りも同様に大阪の業者が請け負ったと思われる。

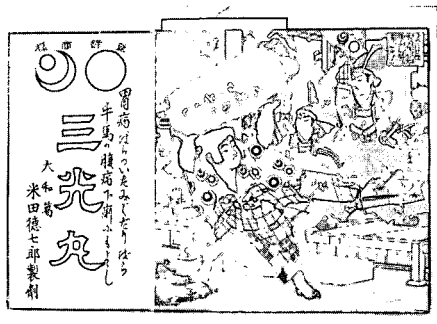


図19 「少年虎之助(加藤清正)と木下藤吉郎」

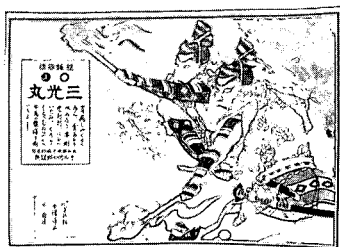


図17 「曾我兄弟の仇討」武者の顔に限取りがあるので芝居絵だろう。「富士の根に本懐遠くや五月晴」との色紙形があり曾我兄弟の仇討の図とわかる。



図18 「楠正成、正行桜井の別れ」



図20 貼り札「浦島太郎」と「真田幸村」。左の真田幸村像の上には堀松寿堂分店赤玉丸とあり三光丸ではないが、明らかに右の浦島太郎と同種で、薬名だけを入れ替えるように大和の同業者間で製作された印刷物だろう。

合わせる事ができるお所版の典型的な印刷物である。薬はこのように物語や神話を背負って広まる商品だったともいえる。絵を家内の壁や柱に貼り、眺めてときに子供に話を伝えたこともあったであろう。

近代(同時代)に題材を得た引札には戦争の色が強く出ている。「桃太郎の凱旋」(図24)にみる大陸侵攻と昔話「桃太郎」のシンボリズムについてここで繰り返す必要はない。一方、戦争に関わりがない「二人のおじさんの対話」(図26)は薬の効用を対話形式で説くものでよくあるほのぼのとした宣伝である。「火の用心 身の要慎」(図27)は数種類あり、鰻と梅干などを禁じた「食い合わせ表」は、富山売薬の土産物にも盛んに用いられ人気だったようだ。戦後昭和四三年(一九六八)まで「食い合わせ」(図28)

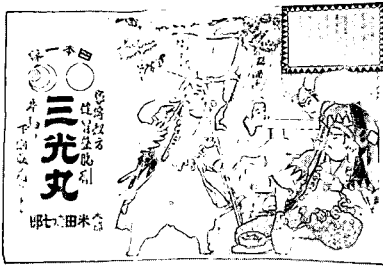


図21 「忠臣蔵 出世酒屋の由来」

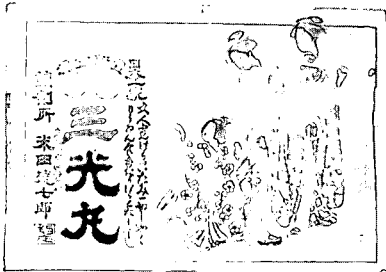


図22 「正月風俗図」(宮川長春の絵を用いた図柄、明治四一年印刷)



図23 「画題不詳の侍の図」 どういう人物を描いたものか筆者にはわからない。かつては円相内に描かれたおそらく「回想」の場面と右の人物との類推で、誰それと了解できたはずである。

図 27 「火の用心 身の要慎」



図24 「桃太郎の凱旋」海に軍艦、空には複葉機が飛び、異国を表す建築の前に服従の意を示す鬼の兵隊が並び、その前を桃太郎と犬や猿が行進する。飛行機の形態から第一次大戦ころのものかという(三光丸「クスリ資料館だより」)。



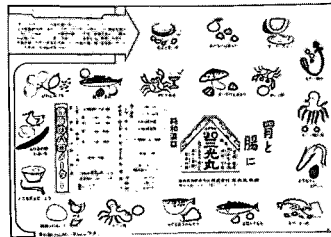
図 26 「二人のおじさんの対話」



図 25 「新東垂の秩序建設は日滿支の親和から」



図 28 「食い合わせと栄養」



が載っている。さすがに国立栄養研究所のコメント、「食べ合わせで中毒が起こるとい
う確証はない」を引用するが、食品中毒には注意しようと呼びかける。本論と関係ない
が、一九六〇年代までは生活文化のさまざまな面において戦前との連続性が強かったと
いえるだろう。もちろん新しい食材別の栄養表なども制作されているが…。

売薬さんの販売戦略

さて、三光丸は配置売薬であるから定期的に訪ねるべき顧客は決まっている。このよ
うに多くの種類の引札やビラをどのように利用したのだろうか。三光丸では、戦前から
戦後にかけてしばらく胃腸薬三光丸以外にトンプクなど別の薬も製剤し販売していたが、
現在ではもっぱら三光丸だけを売る会社となった。実際の販売の様子は三光丸同盟会の記
念誌『同盟人百年の軌跡』にくわしい。行商人は同盟会（明治三二年に同盟規約書が成
立、幾度か改組）に組織され、規約に基づいて行商区域をきっちりと確定された。開拓
されたそれぞれの地域の顧客リストは売買の対象となり、販売地域を請け負うとその領
域を守り、他人のエリアは侵さない。近年は地域ごとに営業所を開設しその下に行商者
を雇う形態を築いていった。したがって得意場所が決まると行商人は自分の判断で地域
の新聞に広告を出したり、看板を布設し、顧客拡大のための布石を行い広告宣伝材料を
本店から仕入れるなど地域経営に当たった。これらの費用は行商人が負担したという。^{*21}
本店が揃えたこれらの多種の引札類は、行商人たちが地域ごとの得意先を意識しそれに
合ったものを選ぶために必要だったのである。

また三光丸には三光団社という新付^{しんぷく}専門の組織団体が作られた。新付とは全国の所定

* 21 『三光丸同盟会創立百周年記
念誌 同盟人百年の軌跡』一九九九
年、三光丸同盟会、二五七ページ

の地域に出向いて飛び込みで新規得意を開拓することである。こうしてできた新しい得意帳はすぐに株式のように売買されたが、三光丸の販売業者以外には売買しない取り決めがあった。新付のために組が結成され、その資金は組ごとに用意する（頼母子講のように資金を集め、新付が成功すれば配当金が得られる仕組み）。諸経費の中には当然広告宣伝材料の購入も含まれていた。新付の際にも引札やピラが有効に使われた。クスリ資料館には菓名の入らない錦絵「大阪名所絵」（図29）が四種のこっているが、土産物に用いられたと思われる。その内の二点は明治三六年の大阪内国勸業博覧会のもので、大阪の三木直商店が発売元である。

三、売薬引札と草双紙（絵入小説）との間

版木印刷をおこなう薬屋

今まで見てきた引札チラシ類は明治以降の多色刷りの絵画中心の広告であったが、本来、売薬の引札は文字中心で次のような特徴がある。まず、長文の効能書きや由緒書きをもつこと、神仏に依拠するものが多いこと、誇大広告や元祖を競い合う広告が多いこととが「江戸時代売薬広告引札貼込帖」^{*22}（図30）を見るとわかる。三光丸にもこの種の引札や貼り札の版木が残されている。

その一つ（図31）は文字通りの売薬引札で、先祖に妙見大菩薩が天下り、紫微垣丸という薬の秘法を伝えたこと、また時代が下って後醍醐天皇が吉野行宮にいたころ、この薬を献じたところかたじけなくも日・月・星の神の授けた秘法だといって「三光丸と勅

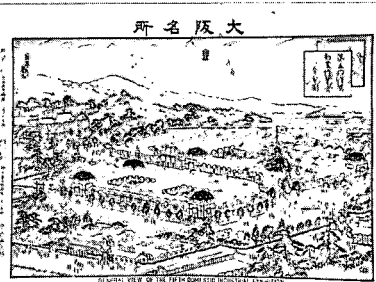


図29 「大阪名所絵」のうち第五回内国勸業博覧会の図 明治三六年

*22 復刻版「江戸時代売薬広告引札貼込帖」東京都立中央図書館、ファミ書房、二〇〇六年

<p>即効湯 土橋 純孝 創製</p> <p>此湯は、秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。此湯は、 秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。</p>	<p>六味地黄丸 一劑六文</p> <p>保命丹 一劑六文</p> <p>龍胆湯 一劑六文</p> <p>此丸は、秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。</p>	<p>本調合所 大和今住 宋田製</p> <p>取次元 賣弘所</p> <p>此丸は、秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。</p>
---	---	---

図30 「江戸時代売薬広告引札貼込帖」から

<p>御免家傳 三光丸</p> <p>大包價四十八文 小包價貳十四文</p> <p>此丸は、秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。</p>	<p>本調合所 大和今住 宋田製</p> <p>取次元 賣弘所</p> <p>此丸は、秘傳の薬材を用いて、 各種の病に効く。特に、 頭痛、腹痛、嘔吐、泄瀉、 痢疾、感冒、風寒、 暑熱、霍乱、吐瀉、 小兒驚風、婦人經痛、 一切の急病に、 即効を奏す。</p>
---	---

図31 江戸時代から続く三光丸引札

号を給わりける」とあり、「此の効能 如神」はらの一切の病はこれで治る、紛らわしい偽薬が多いのでこの看板を目印に買い求めてほしいと書かれている。この版木がいつのものかははっきりとしないが、薬を求めるには「町々在在に取次」があるとするので、配置売薬が始まる前の店売りであった時代、慶応以前にさかのぼるものかと思われる。

売薬業者の元に図32・33のような版木が多数残るということは、薬屋が引札や貼り札を印刷していたことを意味する。富山売薬資料館にも江戸末期の「反魂丹」「一角丸」「奇心丸」などの木版刷り薬袋やその版木が多数残り、売薬人が薬づくりと共に薬袋づくりもおこなっていたことが明らかである。版木の彫刻は専門の彫り師にまかせたが、紙を仕入れ、大きさの異なる袋（差し袋・上袋・薬包などがあつた）に薬名や店名を自前で印刷した。印刷した紙を寸法どおり切り、糊で貼って袋に仕上げることも身近な者でおこなった。外袋に何の薬が入っているのか、婦人薬なのか風邪薬か、子ども用か、虫下しか胃腸薬かを明瞭に示して分包しなければ、消費者がいざという時に役にたたない。江戸時代の売薬は何種類もの版木を持ち、自ら刷り分ける印刷技術に通じていたとは確かだろう。

じつは引札類を自前で印刷する技術と草双紙の製作との距離はごく近い。明治初期のお雇い外国人グリフィスは「一冊の糸で綴じた七枚からなる小さな本」を東京の草紙屋で買った。源頼光の酒天童子退治の挿絵入り一四ページの木版刷りの物語である。寸法は縦約一〇センチ、横約七・五センチ、平仮名書きの本文と挿絵からなる「小さな本」は、江戸時代以来の草双紙である。この草双紙の見開き（正確には袋とじの背を開いたもの）と引札との間に形状的な違いはほとんどない。さらに興味深いのは明治初期の子

* 23 前掲注19「売薬の印刷文化」解説

* 24 鈴木彰「明治期の子どもたちと源頼光の物語」『歴史と民俗』25号、神奈川大学常民文化研究所、二〇〇九年

どもが読む草双紙の内容が英雄歴史物語だったことである。このグリフィスの話を紹介する鈴木彰は、論文「明治期の子どもたちと源頼光の物語」において、明治期の子どもが本と語りを通じて「英雄伝」に親しむさまを見てびっくりするお雇い外国人たちの証言を紹介し、「頼光」の物語がいかに日常に浸透し、当時の社会的かつ教育的意図を担わされていたかを考察した。^{*24}

この論文を私の関心に引きつけて読んでみたい。明治期に歴史・神話物語に基づく絵画が盛んに描かれ三光丸など薬の引札にも表れると述べたが、そうした物語を受容する背景がここにはっきりと示されているのである。明治三年から七年まで福井藩に雇われのちに大学南校に移ったグリフィス（理化学教師）は日本の子どもたちが頼朝、太閤、家康の話に心躍らせ、頼光などの英雄伝をよく知っていることを記す。またフランスの法律学者ブスケ（一八七二年来日）の『今日の日本 Le Japon de nos jours』は、六歳か七歳ころの子どもが英雄伝を読むことを報告し、ロシア正教を日本に伝えたニコライ

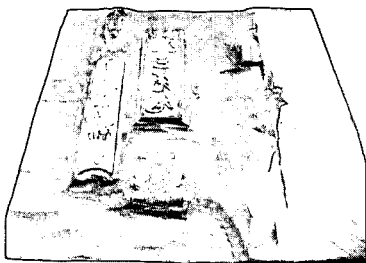


図33 商標印刷用の版木と印刷物（上）

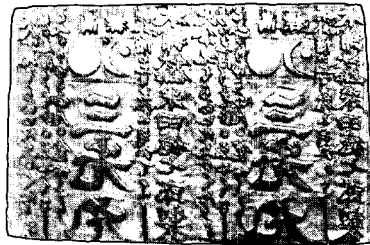


図32 三光丸の薬袋印刷用版木

(一八六一年来日)の見聞記「キリスト教宣教団の観点から見た日本」にも同様の指摘があることが紹介される。^{*25}

ニコライは同書で次のように書く。「どんな辺鄙な寒村に行っても、頼朝、義経、楠木正成等々の歴史上の人物を知らなかったり、江戸や都その他の主だった土地が自分の村の北の方角にあるのか、西の方角にあるのか知らないような、それほど無知な者に出会うことはない」とあり、続けて春に子供たちが道端で凧を揚げているが、「その凧に描かれている異様な人の顔のことが知りたくなって、子供たちに尋ねてみる。子供たちは口々に先を競って言うだろう、清盛だ、^{ナカノリ}尊氏だ」と。^{*26}草紙や絵本、凧絵や祭りの山車飾りなどさまざまに「メディア」に武者たちが描かれていた。身辺にそうした絵や作り物があり、今よりもずっと色彩や明るさに乏しい日常生活の中でそれらは光っていた。どんな辺鄙な寒村でも歴史上の英雄を知っていたということがなければ売薬の引札に物語英雄や武将は登場しなかった。薬屋は宣伝に知恵を絞り、画題に有効な素材を選び技術的に対応するべく常に頭をはたらかせ活動してきた。その実現が基本的に印刷を自前で行ったことだったのである。そして、町や村の人々は何よりその薬が効くことを願い、袋の絵やマークや「三光の由来」全体を日常の中に取り込むことで病に立ち向かったわけである。

おわりに

三光丸の場合、木版手作業時代から機械印刷に変わった大正期に、社内に印刷機を設

* 25 前掲注24「明治期の子どもたちと源頼光の物語」。W. E. グリフィスの記事は『The Mikado's Empire (皇國)』(ハーバー社、一八七六年)とある。

* 26 ニコライ『ニコライの見た幕末日本』中村健之介訳、講談社学術文庫、一九七九年、一四ページ

置し印刷部を設けていた。多色石版刷りはおそらく外部に発注されたが、薬包紙やピラ、効能書きなどの印刷は社内でおこなった。薬包紙の欄外に「三光丸印刷部印刷」とわざわざ印刷したのは三光丸の偽薬に対し、自前で包紙の印刷までしていることを示そうとしたのだろう。クスリ資料館浅見潤氏の御教示によると、この印刷部を担当したのは岡村源太郎という三光丸の店員だった。彼は大正九年に三光丸から独立して洋紙・印刷物の販売を手がける岡村印刷所を設立した。その後も三光丸と岡村印刷の取引は続き、昭和二三年〜三二年にかけての三光丸米田家の帳簿には副材料として能書代、配給用紙代、小袋印刷代として岡村印刷への支払いが記されていた。現在は岡村印刷工業として東京や大阪にも事業部を置く印刷会社として発展している。

富山の配置薬会社の大手である廣貫堂でも、大正末期から昭和初期に立派な印刷場を社内に設けていたことを示す写真がある(図34)^{*27}。奈良県高取町の昭和二六年の町収入の内、製薬業は五千八百六九万円で全体の六三・五一パーセントを占め、売薬に関連する薬袋製造(百三万円)、印刷業は四百九十九万円と「売薬に深い関係を持つものを加えると総収入の七〇パーセントをこえた」という^{*28}。売薬と印刷は関係の深い業種と認識されてきた。売薬関係の印刷物を手掛けて大きく成長した印刷会社は富山県にも存在する。薬業と関連して地域の印刷業が興隆した例を調べることは、明治期の地方出版社についての研究にとっても大事だろう。

印刷物を媒介すると薬と本との関係は意外に近づいてくる。今回は本を書く江戸の戯作者たちが如何に薬を作り、売薬に手を染めていたか、その様子をみていこう。最後になるが、三光丸本店は江戸時代の版本を数多く含む多数の書物(和本)を所蔵することを

*27 勝山敏一「活版師はるかなり」桂書房、二〇〇八年、二四八ページ
*28 前掲注13「大和高取町の売薬業」



図34 富山市の売薬会社廣貫堂にあった印刷場の写真。「廣貫堂営業案内」(明治四二年・一九〇九、富山県立図書館蔵)「活版師はるかなり」(桂書房)より。

記して（概略だがタイトル数約一九〇点、七八〇冊）本稿を閉じたい。

〔参考文献〕 注記以外の資料として

宮本高明『葉』（岩波書店、一九五七年）

吉岡信『近世日本葉業史研究』（葉事日報社、一九八九年）

根塚伊松『売葉版画——おまけ絵紙の魅力』（巧玄出版、一九七九年）

福江充『立山曼茶羅——絵解きと信仰の世界』（法蔵館、二〇〇五年）

玉川しんめい『反魂丹の文化史——越中富山の葉売り』（晶文社、一九七九年）

三島佑一『葉の大坂道修町——今むかし』（和泉書院、二〇〇六年）

渡辺祥子『近世大坂葉種の取引構造と社会集団』（清文堂、二〇〇六年）

『北海道売葉史』（北海道配置家庭葉協議会編・発行、一九七七年）

B・フランク『お札』にみる日本仏教』（藤原書店、二〇〇六年）

新村拓編『日本医療史』（吉川弘文館、二〇〇六年）

『近江名所図会』（臨川書店、一九九七年）

『社寺参詣曼茶羅』大阪市立博物館編（平凡社、一九八七年）

『日本美術院百年史』日本美術院編・発行（一九八九年）

『名画にみる国史の歩み』小堀桂一郎監修（近代出版社、一九九〇年）

* 本稿は平成一九年度国内留学研修における研究成果の一部である。